

中島徳蔵日記(一)

明治三十五年～明治四十五年

三浦節夫

MIYURA SEISUO

一 中島徳蔵の略歴

中島徳蔵は、元治元年(一八六四)に、群馬県佐波郡赤堀村(今井村、現在の伊勢崎市)に生まれた(1)。明治七年に今井小学校下等小学第七年級卒業、明治十年に今井小学校下等小学卒業、明治十一年に今井学校上等小学校第六年級卒業。明治十四年群馬県立中学校入学、明治十八年二月に群馬県立中学校初等中学科卒業、四月に帝国大学予備門専修科後期生として入学し、九月に退学。その後、群馬県内の小学校長を歴任。

明治二十四年に帝国大学哲学科専科に入学、明治二十五年に修了し、明治二十九年まで同学に在学し、哲学・倫理学の二科を専修した。明治二十八年に浄土宗高等学院教授となる。明治三十年に哲学館にて西洋倫理史と倫理学を担当。明治三十二年に東京工業学校にて倫理学を担当。

明治三十三年八月に文部省修身教科書起草委員に任命され、明治三十四年五月に文部省の起草委員を辞任し、哲学館教授に復職した。明治三十五年九月に共立女子職業学校講師に就任。十二月に哲学館事件が発生し、哲学館および東京工業学校を辞任。明治三十六年九月に哲学館に復職した。明治三十七年から『丁酉倫理講演』の編

集を担当（昭和五年まで継続）。明治三十九年に東京高等工業学校講師に復職した。明治三十九年に財団法人東洋大学の商議員に選任された。明治四十一年に跡見女学校の講師に就任。

大正三年に東京高等工業学校講師および日本大学講師を辞任。大正十二年五月に東洋大学学内改革事件が起こり、教授団側に所属した。大正十三年六月に東洋大学学長事務取扱に就任したが、十一月に東洋大学主催の哲学館の祝尊祭中に暴漢に襲われ重傷を負った。大正十四年に共立女子職業学校を辞任。

大正十五年二月に東洋大学学長に就任。昭和二年に大学令による昇格基金募集のために北海道・広島に出張した。昭和三年に大学令により東洋大学が認可され、東洋大学学長事務取扱に就任した。昭和四年に東洋大学第七代学長に就任した。昭和六年六月に東洋大学学長の任期満了し、七月に東洋大学教授に復し、同財団の監事に選任された。昭和十一年に跡見女学校を辞任。昭和十五年五月三十一日に逝去。享年七十七。

中島徳蔵と哲学館との関係を簡潔に述べておこう。

中島徳蔵は明治三十年五月に哲学館講師に就任した。明治三十三年八月に、文部省からの再三にわたる要請を受けて、哲学館を辞任して、文部省修身教科書起草委員となったが、この間に「教育勅語撤回論者」のレッテルを貼られ、明治三十四年五月に文部省の起草委員を辞任し、哲学館教授に復職した。明治三十五年十月の哲学館教育部第一科甲種生卒業試験において、文部省の視学官が中島徳蔵にミューヘッドの倫理学の教授について質問し、その数日後から文部省が哲学館に対して卒業生に教員検定試験免除の特典を与えないとの風説が広まった。そして、十二月十三日に文部大臣菊池大麓が哲学館館主井上巳了宛てに卒業生の無試験検定許可を自今取り消すと命令した。これによって、哲学館事件が発生した。中島徳蔵は哲学館（館主代理）を辞任して、文部省の処分に対し新聞・雑誌で反論し、哲学館事件は明治三十六年の一大社会問題となった。第二回の世界旅行から帰国し

た館主の井上円了は、一カ月後に中島徳蔵を哲学館に復職させた。その後、東洋大学と改称され、明治四十年五月に文部省は再び無試験検定の取扱を認可した。

大正時代の東洋大学は、大正八年に公布された大学令による大学昇格を目指したが、大正十二年にその昇格基金をめぐるいわゆる「紛擾事件」が発生した。大正十三年に中島徳蔵は事件後の学長事務取扱に就任したが、その後には暴漢に襲われて重傷を負いながらも、大学昇格問題に取り組み、ついに昭和三年三月三十日に大学令による東洋大学の設立認可を実現させた。このことから、中島徳蔵は「東洋大学の中興の祖」と言われている。

二 中島徳蔵日記について

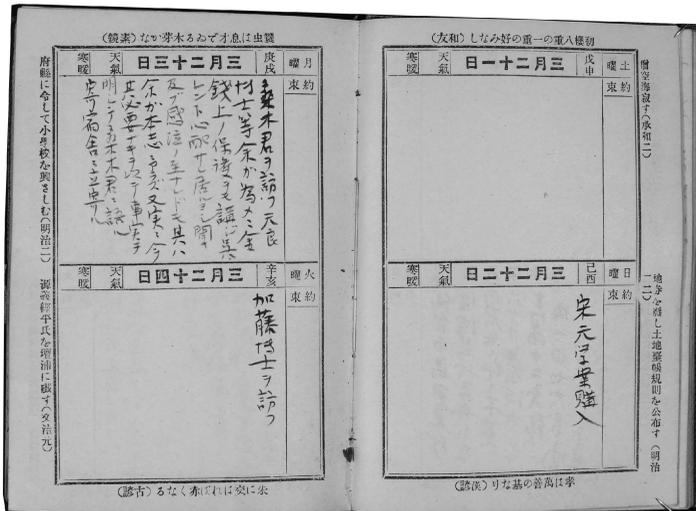
中島徳蔵の日記は、平成七（一九九五）年五月一日に斎藤市雄氏より東洋大学に寄贈され、現在井上円了研究センターに保管されている。この日記については、すでに昭和三十七年に中島徳蔵先生学徳顕彰会によって出版された『中島徳蔵先生』の「日記抄」に翻刻されている。ただし、同書の編集者が内容を取捨選択したので、貴重な記述が翻刻されていないという問題があった。そのため、ここでは、中島徳蔵日記より、私生活、家庭関係、丁酉倫理会の会計関係を除き、研究、教育、学会関係の記述を翻刻することを原則とした。現存する中島徳蔵日記は明治三十五年からで、つぎの一覧表のように残されている（日記の他に手帳が十七冊ある。これらは主として、講義や講演、執筆の構想を克明に記したものであるが、本稿では割愛した）。

このように、中島徳蔵日記は、全て揃っているわけではないが、明治、大正、昭和の三代にわたるものである。この日記を先に翻刻した『中島徳蔵先生』の編集者は、「日記抄について」で、つぎのように全体像を述べている（2）。

「その残っている明治の中で、はじめの幾冊かは殆んど空白で、三十七年の如きは、年間たった四、五日の記事

中島徳蔵日記一覧

和暦	西暦	有無	タイトル	サイズ (タテ×ヨコ・cm)
明治 35	1902	○	教育家用懐中日記	13.2 × 10.0
明治 36	1903	○	実用懐中日記 (金港堂)	12.2 × 9.0
明治 37	1904	○	実用懐中日記 (金港堂)	12.5 × 8.7
明治 38	1905	○	当用日記 (博文館)	19.3 × 13.3
明治 39	1906	○	当用日記 (博文館)	19.3 × 13.3
明治 40	1907	○	当用日記 (博文館)	19.3 × 13.3
明治 41	1908	○	当用日記 (博文館)	19.3 × 13.3
明治 42	1909	○	Pocket Diary MEIJI 42	15.5 × 9.4
明治 43	1910	×		
明治 44	1911	×		
明治 45	1912	○	Pocket Diary MEIJI 45	15.5 × 9.4
大正 2	1913	×		
大正 3	1914	×		
大正 4	1915	×		
大正 5	1916	○	Pocket Diary TAISHO V	15.0 × 9.4
大正 6	1917	○	Pocket Diary TAISHO VI	15.0 × 9.4
大正 7	1918	○	Pocket Diary TAISHO VII	15.5 × 9.1
大正 8	1919	○	Pocket Diary TAISHO VIII	15.0 × 9.0
大正 9	1920	×		
大正 10	1921	○	Pocket Diary TAISHO X	15.4 × 9.2
大正 11	1922	×		
大正 12	1923	×		
大正 13	1924	○	POCKET DIARY 1924	15.5 × 9.4
大正 14	1925	×		
昭和 1	1926	×		
昭和 2	1927	○	DIARY 1927 大正十六年日記	14.0 × 7.8
昭和 3	1928	×		
昭和 4	1929	×		
昭和 5	1930	○	Diary 1930	15.5 × 9.3
昭和 6	1931	○	〔無題〕 (大日本図書株式会社)	11.0 × 7.0
昭和 7	1932	○	Diary 1932	15.5 × 9.3
昭和 8	1933	×		
昭和 9	1934	×		
昭和 10	1935	×		
昭和 11	1936	×		
昭和 12	1937	×		



明治三十六年の中島徳蔵の日記

しか見られないが、巻末の会計欄というのには、丁酉倫理会関係の精細な数字がギッシリ書きこまれている。毎日の記録のためよりも、巻末の収支表が重宝なので日記帳を求められたかに思われもする。しかし、だんだんに日々の記録が多くなり、大正五年ごろになると、断続ながら年頭から歳末までの記事が見られるようになり、それから後は、完全に日記の体形を整えている」

今回の翻刻に当たっては、つぎのような凡例に従った。

凡例

- 一、漢字はすべて通行体で統一した。カタカナとひらがなはそのままとした。判読不能は□で表わした。
- 二、原文に改行はないが、一字下げ改行を適宜行った。読みやすくするために、適宜、句読点を付けた。〔 〕は編者の註である。

なお、日記を翻刻するにあたり、東洋大学大学院の松野聡子氏の協力を得た。記して謝意を表したい。

【註】

- (1) 略歴については、「年譜及び著述目録」(『中島徳蔵先生』中島徳蔵先生学徳顕彰会、昭和三十七年)、『東洋大学百年史 索引・年表編』(東洋大学、平成七年)、『東洋大学人名録 役員・教職員 戦前編』(東洋大学井上円了記念学術センター、平成八年)を参照した。
- (2) 「日記抄について」(『中島徳蔵先生』前掲書、三七九頁)。

中島徳蔵日記

明治三十五年（三十九歳）

一月一日

廻礼

哲学館前九、祝賀会

一月二日

帝国教育会、祝賀往復会、正前十

一月八日

午前、工業学校ニ行ク

一月九日

午前、宗粹の原稿ヲ作り午後發送ス

寺沢子来リ知野静岡師範教諭ノ原稿校閲ヲ托セララル

一月十日

千葉氏来訪共ニ大塚氏ヲ訪ヌ、夜遅ク帰ル

一月十一日

午後大塚氏ト飛鳥山散策

吉田氏ヨリ雀部氏ノ返事アリ

一月十八日

哲学館新年会

一月二十日

此夜チーグレル氏「ニーチエ」論読ミ了ル

一月二十一日

「リール」氏の「ニーチエ」を読む

一月二十七日

雀部氏ノハ今夜吉田氏ヨリ一旦□撤回ノ旨承知

大塚氏ヨリ他ノ候補者ノ話有之。是レ又当分見合セノ旨

申シ置ケリ

一月三十日

「リール」の「ニーチエ」論読了

午後一時丁酉倫理会

二月二日

午後一時より帝教国字改良部

二月二十三日

ニーチエに就て講演す。リール、チーグレル、ブランデ

スを読みたる結果より

三月二十八日

明日午後一時丁酉会

三月二十九日

明日午後、明治校会⁽²⁾中学妥協

三月三十日

明日午後、清国学生接見

五月二十五日

道学先生、平民主義と貴族主義、所謂自由

九月七日

九月八日

工業学校

職業学校

一 甲 社会生活(修事)

二 乙 修心

三 丙 家庭、社会

日本法律

哲学館

(一) 従前の

(二) 従前の

二 従前のを節略

二 従前のを節略

三 「ム」氏

十月十五日

夜六時宮田修氏と自宅会見(丁酉会)

十一月二十二日

午後三時、本郷教育会演説

十一月二十三日

午後勝友会演説。駒込蓬萊町光源寺

十一月二十六日

午後四時、学士会事務所訓育会

明治三十六年(四十歳)

一月十八日

安藤君来り、哲学館回復叶ハズト申来ル。

午后加藤老先生ヲ訪ヒ、哲学館ノコトニ就テ助言ヲ求ム。

岡田長官ヲ訪フ、遇ハズ。

一月十九日

午前調査。

午后岡田長官ヲ訪フ、遇ハズ。

一月二十三日

近世思想の傾向(日蓮宗演題)

一月二十六日

弁解一則（学術会論題）

今晚哲学館事件の記事脱稿。毎日、日本、時事、国民、朝日、読売、二六、万朝ニ投ス。

一月二十七日

丁酉会雑誌原稿出来。

一月二十八日

時事、読売ニ紙哲学館事件を記す。

一月二十九日

先夜図書会社丁酉会雑誌の件に付照会、此日契約書調製

同社へ送り雑誌と届書六通捺印の上送る

二月一日

午前二時半「文部省視学官の言果して真ならば」を草す。

二月三日

読売紙上余ガ弁駁文出ツ。（明日完）

二月五日

桑木君ノ論文読売紙上に見はる。（三日続）

二月十五日

教育学術界原稿ヲ送ル。

文部当局者ノ弁疏、時事新報ニ見ユ。

二月十六日

日蓮降誕会ニ趣ク。

「文部当局者ニ告グ」ノ文起草シ始ム。

二月十八日

脱稿。（時事ニ出スベキ文）

二月二十日

右ノ文、時事、朝日、日本、読売ニ投ス。

二月二十一日

日本、読売掲載。

丁酉会員ノ多数、大体「ム」氏ノ動機論ノ無危険ヲ認ム。

井上（哲）吉田（熊）ニ氏大不賛成。

二月二十二日

夜元良博士ニ逢フ。蟹江君来訪。「伊庭ノ論文」ヲ貰ヒ

タシト云フ。ヨリテ元良博士ト談ジ、モシ丁酉雑誌ニ同文

ヲ出スナラバ同君ノ大意ヲ出シ批評者ノ説ヲ本トシテ掲載

スルトシテ、其請ヲ容ルルコト、ス。

井上(哲)博士ニ速記者ヲ廻ハスベキカ注意ノ件、蟹江

兵庫県教育会論文発送。

君ヨリ承知。

三月二十二日

二月二十三日

宋元学案購入。

時事掲載。

三月二十三日

東洋哲学原稿「哲学館生徒に寄す」ノ一文ヲ草ス。

桑木君ヲ訪フ。元良博士等余ガ為メニ金錢上ノ保護ヲモ

夜大塚氏ヲ訪フ。

講ジ呉レント心配サレ居ルヨシ聞キ及ブ。感泣ノ至ナレド

二月二十四日

モ其ハ余ガ本意ニアラズ。又実ニ今其必要ナキヲ以テ事実

丁酉会員多数者決議案文ヲ草ス。元良博士ノ意二本ツ

ヲ明シテ桑木君ニ語ル。寄宿舎ニ立寄ル。

ク。

三月二十四日

二月二十七日

加藤博士ヲ訪フ。

午后、論語集説、簡明目録及ビ近世名家目録、張之洞『書

三月二十五日

目答問』ヲ求ム。

丁酉会講演集第十二原稿ヲ送ル。

三月一日

三月二十七日

ユニテリアン協会より謝礼参円受領

論語読了。

三月三日

哲学館事件ニツキ生徒及ビ卒業生中ノ有志者醸金(六拾

ロード、アベルブリーの人生快樂を飯塚子に托し、工業

円)シテ余ニ慰藉ノ為メ贈与セラル。而レドモ今回ノ被害

学校ニ返報ス。

ハ寧ロ余ガ為メノ故ニ生徒ノ上ニ係レリ。余ハ安ンジテ之

三月九日

ヲ受クルニ忍ビザルヲ以テ生徒実力養成ノ為メ参考書ヲ購

フベシトシテ、哲学館書籍室ニ寄附セリ。同情ハ余ガ心ヲ養ウテ温カラシム。

三月二十八日

丁酉会編集ヲ専ラ引受ク。

四月四日

丁酉倫理会。

四月五日

成民会（一種の安心）。

四月二十六日

午前九時、麻布筭町曹洞宗学林、主義の衝突ト調和。

五月一日

葦進会、夜六時中央会堂。

五月十六日

(1) 上世中世近世倫理の特徴。

(2) 支那倫理発達の大勢。

(3) 善悪ヲ判断スル力（良心）ハ如何ニ西洋ノ近世ノ

諸大家ニヨリテ説明セラレシヤ。批評的ニ之ヲ述

ベル。

(4) カントの説の大綱。

(5) スペンサーとベンサムの相違。

(6) 孔子の仁。

(7) 子思とアリストートルとを比較し論評せよ。

六月十四日

丁酉会、羽田二趣ク。

六月二十八日

動機論と人物査定。

八月三十一日〔乱丁あり、七月三十一日か〕

扨哲^(意) 残暑尚々嚴敷御座候処益々御清適奉珍賀候。扱先

般哲学館事件に就ては種々御高配を蒙り難有奉存候。然る

に井上館主帰朝以来文部省は依然特権恢復を許さざるに

付、同館は爾今右特権に依頼致さざることに方針を定めよ

りて、小生にも復職可被出旨申聞され候。即ち小生ハ再び

同館講師の一人たることを快諾候次第に御座候。先般来の

御好意御礼詞旁々右顛末、乍略義以書中得真意候。 敬具

1 浮田、2 (中島□)、3 (坪内)、4 波多野、5 藤井、

6 (安部) 7 法貴、○朝永、○吉田、8 村上、○千葉、○

桑木、9 宮田、○(田中)。

元良、○中島、○井上、○加藤、10 島田(毎日)新聞、

○11 やまと新聞、12 時事、○13 日本(安藤)、14 読売、15 朝

日(上野) 16 万朝(山縣)、○17 大学生。

十月四日

成民会。

十月十八日

上州我妻郡教育総集会、「我國民の受くべき訓体」。

十一月一日

成民会(一時半)、自由の本領。

雜録

Japan Gazette I, 31

Japan Mail II, 2, 3.

I, 31

Japan Times I, 30 II, 4

Kobe Chronicle 76 □ ス、

明治三十七年(四十一歳)

四月三日

ユニテリアン協会演説

四月四日

吉田静「山君の所行」

丁西会の雑誌の相談より、其結果講演は長短により、二
より四円迄とし、雑録は大要編輯者の意に従ふも一頁七十
錢の見当とし、不足は当分会の金より補ふとす。議定原案

別冊ノ通。十時帰宅(夜)。

四月六日

両千葉君来訪。間々録を草す。

四月七日

浄土宗祖誕生会演説。

丁西誌ヲ締切ル。

田中清純氏来リテ、十善法話ヲ贈ル。

西田敬止君来訪。座問ヲ訂正ス。

四月八日

午后アレキサンダーを読む。

元良博士に代りて正則中学倫理講話を受持つこと、なる。

一月七日

大塚宅、かるた会二行ク。

一月八日

丁酉誌校正。

一月一日

年礼。

一月九日

学校始。

石井来ル、坊立川へ行ク

一月十日

旅順開城ノ談判。

丁酉誌校正了ル。

一月二日

東洋哲学論文起草。

一月十一日

大学或問ヲ読ム。

午后年礼。

一月十二日

中庸或問ニ移ル。

一月三日

東洋哲学論文改稿、成ル。

一月十三日

中庸或問ヲ読ム。

一月五日

山鹿語類ヲ読ム。

集義和書ヲ読ム。

図書大全、皇清経解一斑等買入ル。

藤樹全書買入ル。

一月六日

語類ヲ読ム。

一月十四日

熊沢氏の著を読む。

一月十五日

午后、集義和書ヲ読ム。

夜「新曲浦島」ヲ読ム。

漁夫の子、漁業ニ倦ク新旧思想の衝突

快樂主義の自家撞着

現実ヲ忘ル、思想

極端の新思想

早稲田大学哲学研究会来ル二十一日午後一時半講演趣。

新曲浦島の倫理見。

一月十六日

新曲浦島読了。

早稲田の題を考ふ、浦島の倫理見異ル。

一月十七日

浦島再読。

一月十九日

浦島ヲ読ム。

一月二十日

浦島論稿ヲ草ス。

一月二十一日

早稲田大学哲学会講演（午後）。

浦島が子の性格不明瞭ニ付其次第ヲ述ブ。始メテ早稲田

大学ニ往来シナリ。

一月二十二日

午后丁酉会、編輯上の件につき協議し、藤井宮田朝永三氏二三頁宛毎月雑録を草することを約す。雑誌の編輯大体

左の通り。

講演（一頁報酬）……

会場料

速記料

雑録（二頁報酬）

新刊、質問（二頁報酬）

編輯

一月二十三日

集義外書ヲ読ム。

一月二十五日

ムイアヘッド抄訳。

集義外書ヲ読ム。

一月二十六日

集義外書を読む。

一月二十七日

外書を読む。

一月二十八日

今日午後読書会出席せず。

集義外書読了。

一月三十一日

中江藤樹全書の中大学解。

二月一日

丁酉原稿ヲ送ル。

二月二日

Problems of Conduct

二月三日

丁酉原稿を草す。

藤樹中庸解。

藤樹ハ演繹的思想法ノ人タルヲ覚ユ。彼ノ学ハ浅キ感

アリ。

二月五日

午前丁酉誌原稿。

浮田氏ヲ訪フ。井上博士⁽³⁾トノ関係ニツキ同博士ト面会シ

テモ互ニ意見ノ相異ヲ認め、人格上ノ所見ハ相認ムルトシ

テ、図書会社ノ催セル晩餐会出席ノ約ヲナス。明日ハ博士

トモ逢ヒテ同様ノ打合せヲナシラクベシ。

二月六日

丁酉原稿、牧野氏の分ニ□□なりしことを気付き電話に

て秀英舎へ申送ル。

二月七日

井上博士を訪ひて浮田氏とのレコグニーションを図書会

社の会にてなされたきことを求む。

哲学館検定認可の未だ受けられざることを聞き、もし其

が余を任用し居るに因するや否やを其筋に問合せを依頼

す。

夜九時、丁酉原稿メ切。藤井氏原稿後れたるを以てなり。

二月十九日

午后成民会講演。

二月二十六日

丁酉会アリ。

三月一日

夜ハ六合原稿（東西思想ノ調和）

三月二日

須藤求馬氏、井上博士紹介ニテ来ル。

夜六合原稿十二時過成ル。

三月三日

村上專精氏、□部医士用件、午前来タル。

今朝六合原稿ヲ発ス。

三月四日

午後丁酉原稿（寄宿舎中心の男女教育）ヲ校閲補正ス、

十一時過ニ至ル。

愛児ハ嘗テ曰ふ、トーサンなどは豪し、大塚さん杯より

豪し、哲学館にも往くし、日本大学にも往くし、職業学校

にも往くし、元良さんの代理もするし、（芝正則に博士の代

理を為す）大塚さん杯は大学許りだとかくの如き言を聞く

時ぞ文学士のツマラヌ称号にてもあれかしと快楽心の出る

なし（畔中偶感）

井上田了氏ハ豪し、左れど彼れに瑕瑾なし、少くともな

しと見ゆ 是れ彼の未だ完全ならざる所か。

三月五日

日本軍奉天ニ逗ル。

千葉氏ヲ訪フ。

此日夜丁酉講演丈原稿秀英舎へ送ル。

三月七日

丁酉原稿に苦しむ。十二時に至る。

三月八日

今夜十二時丁酉原稿ヲマトム。

三月九日

同文館の爲め校訓論を草す。明日速記者来ルの約束。

午後書齋整頓。

奉天占領の号外出づ。

丁酉三十号、本日午前原稿成ル。佐久間君へ手渡ス。

三月十日

午前「国民的理想立定の方法」につき推敲す。

午後演述す。

撫順占領。

三月十一日

今朝上州へ行カント志シタリシガ、哲学館無試験検定願
撈々敷進行セザルニツキ、評議員会ヲ催スニツキ明日参集
ノタメ延引。

三月十二日

午前九時哲学館評議委員会。其用件トハ文部省検定委員
会ガ四月ヨリ一学期間試験シタル上ナラデハ無試験検定資
格ヲ与ヘズトノコトヲ議決シタルニヨリ如何スベキト云フ
ニアリ。余ハ井上哲次郎氏ニ頼ミ、菊池男爵ヲ説キ、モ一
度山川委員長並ビニ文部大臣ニ衷情ノコトヲ行フベシト
シ、其レニ決ス。井哲博士ニ謁シテ其事ヲ頼ム。博士自身
山川氏ニ説キ呉ルルヲ可トスト言ハレタリ。従之。

三月十七日

井上博士ヲ訪フテ哲学館ノ件ニツキ問合セノ返事ヲ聞
ク。望ミ叶ハズ。直ニ館主ニ通ズ。

正則のペーパー試験調済む

三月二十一日

哲学館試験問題、本日マデニ差出ス約。

三月二十二日

日本倫理原稿をまとむ

三月二十三日

哲学館同窓会。夜ハ送別会。

三月二十四日

日本倫理原稿をまとむ

三月二十五日

午後読書会

三月二十六日

哲学館評議委員会、午前。

三月二十七日

午後一時正則中学卒業式演説

三月二十八日

古学派の原稿整頓

三月二十九日

古学派の原稿整頓

午後高瀬君と共に安藤弘・八木光貫氏、哲学館幹事送迎

会の件につき哲学館に行き相談す。

三月三十日

日本倫理の組織

明道（心学派）

其経験派ニ対し

王陽明の反対

其心学派ニ対し

直覚主義ニ対し□権

派歴史派（古学派）

の反対—

—日本陽明派の特色

伊川（経験派）

個人主義に對し公利

派の反対

神道派の反対

日本朱子

其異国教ニ對し

其歴史主義ニ對し□□派

三月三十一日

六合雜誌原稿ヲまとむ

四月一日

夜、日本大学二年生会合ニ臨むの約（午後七）

午前哲学館卒業式

午後、新旧幹事送迎会

四月四日

午後、朝永・藤井両氏訪問

四月六日

丁酉会原稿調製

四月十一日

哲学館稽古始（午後一時）

四月十二日

午後一時哲学館臨時講演

明治三十九年（四十三歳）

一月八日

本日哲学館ニ於テ井上學長ガ、前田博士ニ同館ヲ讓渡セ
ルコトヲ發表セリ。（前月三十一日ニ此事ヲ内々自分ニ披

露セラル）生徒及教師ニ向ツテ告テ曰ク、カクスル理由ハ

(1) 神經衰弱症ニ罹レルニアリ(2) 本館ハ井上一個ノ私有ニ非ルヲ公示スルニアリ(3) 余ハ生レテ十年無衷ニ過ギ、尋デ二十年社会ノ教育ヲ受ケ、次デ二十年社会ヲ教育シタレバ、社会ニ向ツテ教育ノ恩義ヲ償ヘリ。此レヨリ精神の二井上一個ノ遺物トモ見ルベキモノヲ成サントス。突然私断シテ生徒出身者并ニ教師ニ之ヲ謀ラザリシハ其罪浅カラザレドモ、右ノ意志堅ク、到底何人ノ助言ニヨリテモ翻心スル能ハザリシガ為メナリト。

彼ハ精力絶倫ナリ智慮周密ナリ才能豊富ナリ。唯ダ決シテ精神家ニハアラズ。子弟朋友ヲ引キツケテ、己レニ同化スルノ人ニ非ズ。

彼ガ子弟朋友ヲ見ルハ飽ク迄一種ノ手段方便ニ外ナラズ。

故ニ又子弟朋友モ亦タ彼ヲ手段方便以上ト見ルコト稀シ。

彼レガ事業家タル所以ナリ。彼ハ俗界ノ偉人ナリ。彼ガ所謂精神の遺物ナルモノ果シテ何ゾ。曰ク功智蓋シ此ノ外

ニ出ルコトナケン。

彼ヲ冷酷ト評スルモノアリ。恐ラクハ当ラジ。彼ハ妻子ヲ愛スルヲ知ルナリ。冷酷ト見ユルハ事業ノ愛ノ為メナリ。彼ハ理想低ク手段ニ富メル小心ノ事業家ナリ。冷酷モ亦タ小冷酷ニスギズ。一方ヨリ見レバ甚ダ義理固キ人ナリ。欽仰スベクアラザルモ、嘆賞ニ値イスル偉人ナリ。

明治四十年（四十四歳）

五月十一日

今日高島氏より徳川史（早稲田出版）を仮り来る。

熊沢蕃山履歴を明にするを得たり（其夜会記に出て居ると云ふ）

夜、夏目氏朝日新聞へ入社ノ辞ヲ読ム。思ヒシヨリ拙文ニシテ分析ニ長スルヲ思フ。

浅野氏文学史百頁評を読む

五月十三日

午前倫理小篇編輯

夜ハ亜リストートル倫理書を読む

来ル二十六日、宇都宮行（県教育会）を誦す。演題ハ「ネ
ルソンと東郷との信仰比較論」カ「孔子とソクラテズ論」
カにすべし。未だ通知はせず。

曹洞宗大学林へ演題「至善の一解釈」

五月十四日

東洋大学、昨日中等教員無試験検定認可ヲ受タル由承知
ス。余ノ為メノ故ニ之ヲ褫奪セラレシヨリ足掛六年トナ
ル。事理明白ノコトモ即行セラレザルコト此ノ如シ。

小倫理書を公にせんとして調査す。東亜の光中 中島博
士のグリーン批評を読む。要領を得ぬ説、シマリなき説と
覚ゆ。翻つて英百科全書のアリストートル、此も妙ならず。
ヨードルのアリストートル并ニチーグラのも見る。同氏
のが合理的活動説たるは動かぬ所なるを知る。

【註】

- (1) 大塚保治
- (2) 加藤弘之
- (3) この「伊庭ノ論文」とは、丁酉倫理会「伊庭想太郎

- (4) による道徳的判断」(「丁酉倫理会倫理講演集」第十
二号、明治三十六年四月十五日、一―三〇頁)を指
すものと考えられる
- 井上哲次郎
- (5) 中島篤(先妻との子)